

論文審査の結果の要旨

論文題名 吉屋信子研究

吉屋信子は、これまで、大正期に発表された『花物語』などの少女小説が中心に研究されてきた。近年、中原淳一の挿絵なども視野に入れた表象としての〈少女〉をめぐる研究が盛んになってきている。しかし、吉屋をメディアの寵児とした新聞や婦人雑誌に発表された連載長編小説についての本格的な研究はようやくはじまった段階である。本論文は、『地の果まで』、『女の友情』、『良人の貞操』、『母の曲』、『女の教室』などの昭和戦中期までの作品を連続して考察することで、吉屋の連載長編小説の世界を明らかにしようとする意欲的なものである。なお、本論文の第二章（「日本文学」平成 25 年 11 月）と第四章（「昭和文学研究」平成 24 年 9 月）はそれぞれ全国学会誌に採録されており、竹田氏の研究の意義は学会的にも認知されている。

本論文の大きな成果は、従来、資料的に十分に検証されてこなかった、作品の成立状況、社会現象化した作品の受容、メディア・読者の反応、吉屋自身のイメージの流通、映画化の問題などの幅広い領域の基礎的な情報をそれぞれの作品に即して明らかにしたところにある。そうした手法が集約的に発揮されているのは第六章「流通するイメージ—雑誌記事に見る吉屋信子像」である。ここで竹田氏は女性の成功した流行作家、しかも〈同性愛者〉としての吉屋がメディアの中でどのように表象され消費されたのか、あるいは吉屋自身がどう対応したのかを豊富な資料を発掘することで考察している。吉屋は「男性的」なイメージを付与される一方で、女性読者との強固な結びつきから、過剰に「女性的」なイメージが与えられて、当時の女性を代表する役割を担っていたという興味深い事実が指摘されていた。

第八章では、オリーブ・ヒギンス・プロローティの『ステラ・ダラス』を吉屋が翻案した『母の曲』を取りあげている。この作品はこれまで、ほとんど研究されてこなかったが、竹田氏はその成立を考証する一方、原作と翻案、それぞれの映画化作品も考察しており、この章は母性愛をテーマとする〈母もの〉と呼ばれる映画群の起源をさぐる研究ともなっている。各作品の差異が明らかにされたことも重要だが、竹田氏は吉屋の翻案において娘が実母を過剰に擁護することによって、〈母〉の価値の無根拠性が浮上してくることに注目している。これは当時の支配的な言説である家族国家観への批判となっている可能性がある。しかし、一方で、作品の後半では、実母から継母に〈母〉が交代することによって、その批判が家族国家観に回収される限界も指摘されている。

こうした同時代の社会的な言説との葛藤の存在の指摘は、吉屋研究における重要な成果といつてよい。もちろん、単発的な研究はすでにあるのだが、大正期から昭和戦中期の複数の連載長編小説を追跡した研究としては初めてのものとなる。以下、その成果を摘記する。

第二章で考察した『地の果まで』は吉屋が「大阪朝日新聞」の懸賞小説募集に応募して一等に当選し、少女小説の世界から他のメディアに進出するきっかけとなった重要な作品である。竹田氏は、「時代は現代、新聞連載に適する家庭の読物」という募集規定に対応した作品世界を支え

る言説として吉屋が導入したのが〈教養主義〉であることを明らかにした。作中人物たちは、阿部次郎や和辻哲郎の主張するように、作品の後半で次々に〈人格〉を向上させていく。しかし、竹田氏は、吉屋が中心的な作中人物を性差のために、その言説との間で混乱するように設定していることに注目している。男性的な〈教養主義〉的な価値観を主張するのは姉の緑で、それを本来実現すべき弟の麟一はその価値観に同一化できない人物だった。二人は自らのジェンダー／セクシュアリティと〈教養主義〉との齟齬に苦しむこととなる。最終的に、彼らの葛藤・混乱は〈教養主義〉的な成長の枠組に回収されてしまうのであるが、竹田氏は彼らの葛藤や違和感が作品中に痕跡として残存しており、言説の欺瞞性を暴き出す契機となっていることを指摘している。竹田氏が吉屋の長編小説から、こうした批評性を見出した意義は大きいだろう。

第四章では、映画化・舞台化などの人気も相俟って、吉屋の人気を決定づけた『女の友情』が考察されている。男性中心的な社会に対して〈女の友情〉の可能性を描いたとされる作品であるが、竹田氏は主人公由紀子の〈母〉になることの拒否、そこから生ずる〈異性愛〉の否定と〈同性愛〉志向の存在を指摘している。しかも、竹田氏によれば、由紀子は無意識のうちに〈異性愛〉のモデルを下敷きに、親友と関わろうとしていた。したがって、この作品に描かれた〈女の友情〉の共同体は〈異性愛〉秩序を無前提に肯定するものではなく、複雑な様相を呈していることが明らかにされた。所謂〈良妻賢母主義〉の枠組を体現すべき、上流階級出身の由紀子がかえって秩序を混乱させる要因となっているのである。作品に描かれた種々の葛藤は最終的には〈異性愛〉秩序に回収されることになる。竹田氏はその限界を指摘しているが、同時に、由紀子の欲望が封じられていく過程から、逆説的に〈異性愛〉秩序への抵抗や制度の攪乱の可能性を読みとっている。これは既成の秩序との親和性が強いと思われがちな、吉屋の通俗的な連載長編小説の世界を再評価するための重要な視点であると思われる。

第五章では、映画化・舞台化などによって空前の人気を博して、社会現象的なブームを引き起こした『良人の貞操』を考察している。従来、この作品は、主人公邦子が親友の産んだ、良人の子どもを自分の子として育てようと決断し、実際にそのように事態が進行することから〈良妻賢母主義〉の枠組に忠実な作品と理解されてきた。しかし、竹田氏は邦子が〈良妻賢母〉に変身する際の強引さ——良人を完全に支配し、問題は金銭によって解決し、親友の妊娠・出産のプロセスを追体験し、出産後の親友はマニラに〈追放〉されるなど——を指摘して、彼女の〈母〉としてのグロテスクなありようを浮かびあがらせている。竹田氏は〈良妻賢母主義〉の枠組に過剰に忠実な〈理想〉像が描かれることによって、かえって、その〈理想〉像に応ずることの矛盾と困難が露呈する可能性を読みとっている。第四章の考察と同様、重要な視点を提出している。なお、竹田氏は掲載雑誌の関連記事などから読者やメディアの反応などを発掘しており、資料的にも興味深い考察となっている。

吉屋は日中戦争の本格化とともに、婦人雑誌の特派員として戦地に赴き、報道や講演などを通して、戦争協力をしていくことになる。銃後の女性動員に果たした吉屋の活動は多くの批判を呼んできた。竹田氏は第九章で、この時期の作品として、女子医科専門学校の同窓生である七人の女性医師を描いた『女の教室』を考察している。竹田氏は戦後に発生した本文の異同の問題を明らかにしたうえで、初出で考察することの重要性を指摘した。この作品では、中国・満州に関して後進性が指摘されるものの、一方的に非難されることはなく、また、日本の指導的な位置は自

